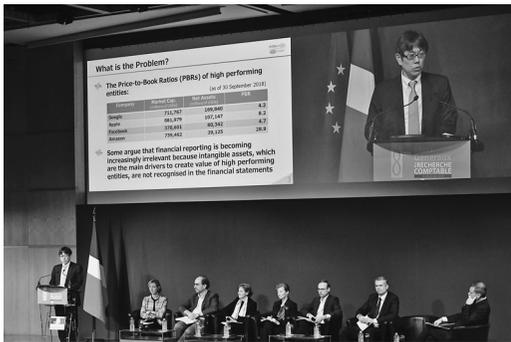


国際関連情報 国際会議等

フランスANC主催 会計リサーチ・シンポジウムの報告

かわにし やすのぶ
ASBJ 常勤委員 川西 安喜



はじめに

2018年12月10日、フランス・パリにてフランスの会計基準設定主体である会計基準局(ANC)主催の会計リサーチ・シンポジウムが開催された。今年は「会計と非財務情報」をテーマに議論が行われ、フランスの学者による論文の発表、論文のテーマについてのラウンドテーブル、及び論文のテーマに関するスピーチが行われた。ラウンドテーブルの参加者やスピーカーとして、日本を含む各国の会計基準設定主体の代表も招かれた。議論はフランス語又は英語で行われ、同時通訳が提供された。

スケジュール

スケジュールは以下のとおりであった。

- ・開会の辞
- ・会計と非財務情報：現在の状況及び実務の概観
- ・持続可能な企業の利点と課題：ESG 報告を巡る議論
- ・グローバルな好業績企業の視点とリスク：無形資産を考える
- ・包括的な企業報告書へ？ 誰のための、どのような目的で作る、誰が作る報告書か
- ・欧州の公益と企業報告
- ・閉会の辞

グローバルな好業績企業の視点とリスク：無形資産を考える

日本は「グローバルな好業績企業の視点とリスク：無形資産を考える」のセッションのスピーカーに招かれ、筆者が報告を行った。

ラウンドテーブルの議論の対象となる論文の著者は、Elisabeth Albertini氏(パリ第1大学・企業経営学院(IAE))とStéphane Le-francq氏(フランス国立工芸院(CNAM))であった。論文の趣旨は、財務報告書に含まれている「経営者による挨拶」の中で用いられて

いる無形資産に関する表現を分析した結果をもとに、無形資産を4種類（人的資本、デジタル資本、顧客資本及び環境資本）に分類して開示してはどうかというものであった。

論文の簡単な紹介の後、スピーカーとして筆者が、我が国における自己創設無形資産の考え方について、識別不能な自己創設無形資産は財務報告の目的に照らして認識すべきではなく、識別可能な自己創設無形資産であっても測定に困難さがあるため認識すべきではないとしたうえで、財務報告において何らかの改善を行うとすれば開示を充実させることになるのではないかとこのことを簡単に述べた。

ラウンドテーブルの参加者は、前述の論文の著者及びスピーカーの筆者に加え、以下のとおりであった（敬称略、順不同）。

- Corinne Baudoin（フランス証券アナリスト協会（SFAP））
- Florian Bercault（Estiméo社）
- Françoise Flores（国際会計基準審議会（IASB））
- Jérôme Julia（Observatoire de l'Immateriel）

ラウンドテーブルにおける議論は「IASBは無形資産についてどのような取組みを行う予定であるのか」といった内容に終始し、IASBの理事からは、IASBは積極的に自己創設無形資産を認識するような会計基準の開発は想定しておらず、何らかの取組みを行うとしても開示の充実になるのではないかとこの個人的な予想が示された。

おわりに

フランスで行われるシンポジウムは、ここ数年、12月に行われる会計基準アドバイザー・フォーラム（ASAF）会議の前後に開催されており、ASAFに参加している各国の会計基準設定主体の代表の参加率が高い。IASBの本部があるロンドンに近いために質量ともに充実したゲスト・スピーカーを呼ぶことができるのは羨ましい限りである。

今年のシンポジウムのテーマは非財務情報であり、会計基準の開発をIASBに委ねている各国の会計基準設定主体において関心の高いテーマとなった。財務諸表の利用者や研究者の中には、財務情報と非財務情報を区別せずに議論している人もおり、これらを明確に区別して議論することが会計基準設定主体としての課題であることを痛感した。

